

人類学者レヴィストロースは1938年にアマゾン奥地で先住民「ナンビクワラ族」と接触した*。彼らは衣服を一切身に付けておらず、文字を持たないばかりか絵や紋様を描くといったこともせず、財産は木片、動物の骨、毛皮の切れ端といった粗末なものばかりで、夜になると土の上でそのまま眠り、近隣先住民からも「ウアイコアコレ（地べたに眠る連中）」と揶揄される有様であった。

しかし、これをもって彼らを「文化を持たない貧しき未開人」と断ずるのは早計かもしれない。ナンビクワラ

を利用しようとする程の社会的な知性、そしてその知性を培う素地となっている文化を彼らは有していたのだ。

ナンビクワラ族は周辺のどの先住民とも文化的特徴が異なっており、そのルーツはコロンビアで大文明を築いたチブチャ王国にあるという。彼らは繁栄を極めた王国の末裔であり、長い歴史の果てに原始生活に回帰した人々だった。彼らは独自の精神性とそれに根差した規範や宗教観を有し、「物を持たない文化」に生きている。

現代の実利や合理に重きを置く価値観では、彼らの文化的豊かさを到底測りきることはできない。それだけ

数 | 理 | の | 窓

ウアイコアコレ (地べたに眠る連中)



族と生活を共にしたレヴィストロースは、ある時族長にメモ用紙を要求された。族長はメモ用紙に何やら線を描き、あたかも西洋人と意思疎通を図ったかのように装いながら、レヴィストロースらが持参した部族への贈り物を部下達に配り始めたのである。文字を知らないはずの族長は、西洋人達の振る舞いを観察する中で、文字というものが一種の権威を生じさせるものだということを理解していた。しかしながらこの目論見は失敗に終わり、逆に多くの部下達の離反を招いてしまった。族長の文字には意味の保存という文字本来の機能が欠如しており、このパフォーマンスが族長の権力強化を狙ったブラフに過ぎないことを部下達も看破したのである。未知の概念と遭遇した時、その本質を速やかに見極め、更にはこれ

「豊かさ」の価値観とは、幅広く、奥深いものであることを示唆しているように思える。

レヴィストロースは「合理性を追求することは道理に適うが、合理性の追求の中で削ぎ落ちる要素にこそ魅力が宿っている」と説いたが、昨今のESGやダイバーシティといった多様性を求める機運の高まりを見るにつけ、人類を考察する氏の慧眼には感嘆せずにはいられない。多様な価値観を許容することは、それだけ多くの「豊かさ」を見出すことにつながるはずだ。

その後のナンビクワラ族だが、現代文明に触れて変容し、現在は洋服を纏い携帯電話を操るそうだ。しかし、夜になれば彼らは今でも地べたに眠っている。(須貝 悠也)

* 「悲しき熱帯Ⅱ」、レヴィストロース著、中央公論新社、2001年。